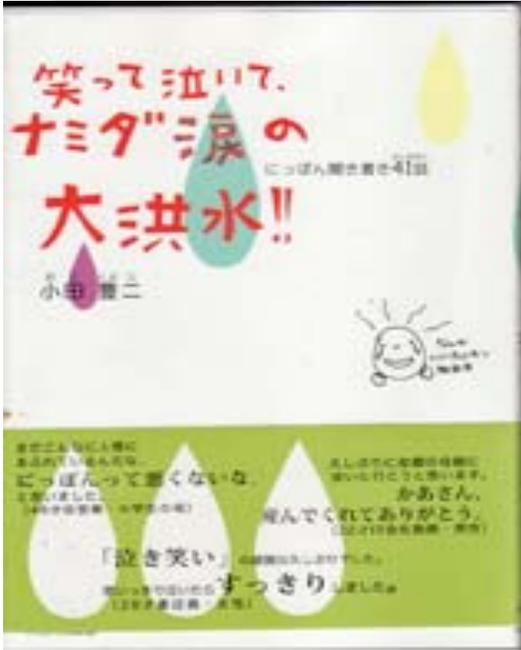


# まんだら通信

第171号 (通巻203号)

平成22年(2010)09月 佛誕2576年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
http://www.shiunji.org/  
Mail post@shiunji.org



## 二ツポンは良い国でした

台風九号が連れてきた久しぶりの雨と涼しさを、野山も畑も生き返りました。新聞テレビは余り報道しませんが、中国や北朝鮮、ロシアを始めとするヨーロッパやオーストラリアなど、干ばつや大洪水で大変な被害が出ているそうですね。

その点、国全体を危うくするような大災害の少ない日本は有り難い国だとつくづく思います。

一番西の、沖縄県与那国島から北は北海道宗谷岬まで二千五百キロ、ほぼ南北に細長い日本列島は、太陽の恵みをいっぱい受け、季節のメリハリがあり緑と水が豊かな、世界でも稀な珍しい国といえますね。

その証拠に、『日の丸』は日本の国旗ですが、太陽そのものを国の象徴としているのは日本だけです。

また、ことあるごとに異民族が攻め込んでくる大陸と違い、攻める側には不便な、海を隔てているということも幸いです。

八百年前にたった一度だけ、モンゴル帝国とその属国の高麗が攻め込んできた『元寇』という例外はありましたが、幸いにもこの国を乗っ取られることはありませんでした。

このような恵まれた国に住み続けた日本人は、もともと我を張ることや争いごとが苦手です。

海によって外国と隔てられていることや、恵まれた自然環境と無関係ではないでしょうし、多分縄文時代から蓄えられた日本人の心だと私は思っています。

「渡る世間に鬼はない」、袖触れ合うも多生の縁」は、この辺の事情をよく表した言葉でしょう。

また、たまたま貧乏だからといってその為卑屈になることもありません。鴨長明の『方丈記』や兼好法師の『徒然草』が、千年近くたって未だに読者の心がさせることではないでしょうか。

幕末、神奈川に上陸したイギリス人は「日本人はどう見ても貧乏であるが、笑いや顔で皆すがすがしい顔をしているのが不思議である」と、日記に書いてあるそうです。

すし、明治十一年に東京から函館まで数ヶ月の間、従者と二人旅をして『日本奥地紀行』を著した、旅行家イザベラバード女史も、行く先々の日本人の品行について、こちらがこそばゆくなるような好感を以て書いています。

詩人で外交官のフランス人ポールクローデルは、大正十年(1921)大使として日本に赴任する前のインタビューに答えて

「日本は極東最大の陸海軍を持つ強国ということにとどまらない。日本は非常に古い文明を持ちながら、それを見事に近代文明に適応させた国、偉大な過去と偉大な未来をあわせ持つ国でもあるのです。」

そしてまた退任後の昭和18年、パリでの夜会で次のようにスピーチしました。「私がどうしても滅びてほしくない一つの民族があります。それは日本人です。あれほど古い文明をそのままに今に伝えている民族は他にありません。」

日本の近代における発展、それは大変目覚ましいけれども、私にとつては不思議ではありません。日本は太古から文明を積み重ねてきたからこそ、明治になって急に欧米の文化を輸入しても発展したのです。どの民族もこれだけの急な発展をするだけの資格はありません。しかし、日本にはその資格があるのです。古くから文明を積み上げてきたからこそ資格があるのです。」

そして、最後にこう付け加えたそうです。「彼らは貧しい。しかし、高貴である。」

占領中の昭和23年ヘレン・ミアーズ女史が『アメリカの鏡・日本』を書いて、マッカーサーから発禁処分を受けました。

大東亜戦争は、アメリカにより大きな責任があるという記事が、マッカーサーを怒らせたのですが、平和を愛する日本が何故戦わなければならなかったか、学校で教えずマスコミも言わない、この国の正しい歴史を私たちが子や孫に伝えなければ、たとえば、先月10日の菅首相の、韓国への『お詫び談話』のような一八〇度あべこべの考え方を、謂われなく独り歩きさせてしまい、間違いなく日本が沈没することになります。



これも、ご縁の皆様の色々な形の支えがあればこそです。◆今月の野草は、ハマカンゾウ【ゆり科ワスレナグサ属】です。白浜の焼却場近くの道端に咲いていました。植物図鑑でいうように群生はしないようですが、海岸近くの岩場に多く見かけます。涼風が立つてくる頃、深緑の中の鮮やかなオレンジ色が目立ちます。草丈は1メートルぐらい。花の大きさは8~10センチ程度でしょうか。夕方にしおれる一日花です。沖縄では、栽培して花を食用にするとか。どんな味がするのでしょうかね。

2010.09.09 龍渉

ご供養料は例年通り2,000円です。ためになるお話もありますし、仏事に最適の彼岸中です。是非誘いあってお出かけ下さいますよう。◆場合によっては、敗戦のどさくさに満州の荒野に果てていた身が、運命とはいえ永らえて、お陰様で今月5日76歳になりました。幼稚園を頭に三人の孫が、庭で摘んだ花を小さなやかに活けて届けてくれました。読むのに苦労する字の手紙もついていました。◆どのくらいの部数発行しているのですかと、よく聞かれます。毎月約1,000部程度で、そのうち郵送分が550通です。

◆昨日は二十四節気では白露でした。秋めいてきて草花に露が降りる頃という意味でしょうか。それにしても、今年は暑さが続きました。もう少しこの暑さが続いたら、私など“干物”になってしまうでしょう。今日は漸く25度程度になりましたがまだ分かりませんね。◆先月書いた胃潰瘍のことです。先生が「1センチぐらいの大きさだけど、深いから注意が要ります。取り敢えず薬を変えましょう」ということで、真面目に飲んでます。痛みはなくなりました。◆今月24日1時半からはお施餓鬼です。新しい仏さまとご先祖代々への孝行、にお塔婆供養をしましょう。

## 余滴

# につぼん人情小噺

三遊亭鳳豊

## 第五十七話 帰郷

この夏休み、故郷に帰った方もたくさんいらっしゃるでしょう。

でも、困るのがペットですよね。家に置いて出かけるわけにはいけません。しかも、ペット・ホテルに預かってもらう人もいらっしゃいますが、やはり、今年も大変に多かったです。家で飼っている猫と犬を車に乗せまして、ペットも含めた家族全員で田舎に行かれた方だそうですね。

いや、ほんと、昔から、そういう方はとても多かったですよ。「故郷に二匹」と申しまして……。

今日は、故郷、広島島の呉に久しぶりに帰省した人の話をいたしましょう。

主人公は、元宝石会社の副社長をしていた河野善四郎さん。通称、善ちゃん。呉三津田高校時代は、野球部のエースで四番バッター。野球は高校まででやめました。その後、早稲田大学に進み、二十人の小さな宝石会社に入社。持ち前の度胸と根性で、従業員七千人の企業にまで成長させ、その世界では知らない人はいないというほどのビジネスマンです。

いまは、リタイアされて、経営者だった経験を生かし、産業コンサルタントとして活躍しています。お嬢さんは結婚され、イタリアのローマに住んでいます。まさに、悠々自適の老後ですね。

そんな善ちゃん、実は、子供の時に一度、強い挫折感を味わったことがあるそうです。まずは、その話からはじめますね。

小学校三年生になったある日、友だちといっしょに担任の女先生の家に遊びに行った。すると、先生が昼食にカレーを

つくってみんなに食べさせてくれたそうです。ところが、同級生たちは大変にお行儀がいい子たちで、食べた後、自分が使った食器とかスプーンを台所に運ぶのです。

ところが、元来、のんきな善ちゃん、「わー、おいしかったア」とひとり満足していつぱいになったおなかをさすりながら、畳の上にひっくり返っていたのでした。

その時はそれで終わったのですが、問題は翌朝です。その担任の先生がクラス全員の前で、こんなことを言ったのです。「いいですか、人の家にお邪魔した時は、上がる時は靴を自分で揃えること。食事が出たら、いただいた後は必ず自分の食器を台所に持っていくんですよ」

なぜ、あの時に言わないで、こんな時に言うんだ！善ちゃん、頭にカーッと血が上りました。いっしょに先生の家に

行った友だちは全員、にやにや笑いながら、善ちゃんの方を見ていました。それからというものの、善ちゃんは、もう無茶苦茶に暴れ、クラスの問題児となり、親が学校に呼び出される始末でした。

五年生の時、担任が変わりました。竹並先生という少し年輩の女性の先生でした。

この先生、どういうわけか、善ちゃんのことを叱りません。親が不思議に思っ

て聞くと、「いい子ですよ。子供らしく、のびのび育っています」などと言うのです。この先生だったらわかってもらえるかもしれないと思っただけで、あれ以来ずつとわだかまっていた例のカレーライスの一件を先生に聞いてみた。自分が食べた食器は自分で運ばないといけないのか、と。すると、先生は「あなたは、どう思うの？」と五年生の善ちゃんに聞き返したそうです。

善ちゃんは言いました。「片づけてって言われたら、率先してやったのに、その時には言わないで、教室でみんなの前で言うなんて、卑怯だ」。すると先生は、にっこり笑ってこう諭してくれたそうです。

「そうよ。まだ小学生なんだから、そこまでしなくてもいいと先生は思うわ、善ちゃんは善ちゃんらしく行動すればいいの。まして、担任の先生のお宅でしょ。私の家に来たら、何もなくていいからね。おなかさすって、ああ、おいしかったって言ってくれたら、それだけでうれしいのよ、先生は」

話はそれから四十五年後に飛びます。父親の法事のために、河野さんが久しぶりに呉に帰ることになり、ふと、懐かしくなり、竹並先生に電話をしました。

「先生、河野です。お久しぶりです。覚えてますか。善四郎です」

「あら、善ちゃん。覚えてるわ。元気なの？私はずいぶん。今年九十一歳になるんだもの。車椅子生活よ。そうそう、この間ね、善ちゃんたちが卒業したあとと赴任した別の小学校の同窓会に呼ばれてうれしかったわ……」

先生は、近況をとてもうれしそうに話してくれました。その時、善ちゃんはふと思いついたのです。小学校卒業以来、クラス会が一度も開かれていないことを。先生への電話が終わると、善ちゃんはいまでも付き合っている幼な馴染に電話を入れ、「竹並先生を呼んで、クラス会をやるぞ！」と宣言しました。

昔のガキ大将の命令です。電話があちこちにかかります。そして、とうとう、当日、十八人の同級生たちが集まりました。四十五年ぶりの再会です。先生の車椅子を善ちゃんが押して会場に入ると、ひとりひとり、先生に挨拶にやってきました。

「先生、覚えていますか」。ひとりが自分の名前を名乗ろうとすると、先生は大きな声で「言わないで！ いま、思い出すから……ガンちゃん、あなた、ガンちゃんですよ！」。

九十一歳の先生が次々と名前を思い出してくれるので、もう泣いている女性もいます。

「先生ー」なに、泣いているの。うれしくて泣きそうなのは、先生のほうよ。同窓会は泣き笑いで、大変に盛り上がったそうです。

善ちゃんは、同窓会が終わって、法事も無事に済んで、東京に戻る日、先生の家を訪ねました。ご主人はとうに亡くなり、お子さんたちは独立して先生はひとり暮らしでした。

「先生、また、帰ってきますね」

と、善ちゃんがしばしの別れの言葉を言うと、先生は、車椅子に座ったまま、小さな花束を善ちゃんにくれたそうです。見ると、きれいな紫の花々。

「善ちゃんがまた戻ってくるように、キキョウ（帰郷）の花よ……」

今月も三遊亭鳳豊師匠と、MOKU出版さんのご好意に甘えて転載させていただきました。

ところで、表の写真をご覧下さい。このほど『につぼん人情小噺』を41話分、『笑って泣いてナミダ涙の大洪水！』というタイトルで発行されました。

鳳豊師匠のご本名小田豊二さんになっております。転載させて戴いているご好意に少しでも応えられればと、MOKU出版さんに十冊送ってもらいました。

特にお願いして、小田先生のサイン入りです。憂鬱な話が多いこんな世の中、読めば元気が出ることを請け合います。

先着十名様にお届けします。申し訳ありませんが、早い者勝ちです。